

昔ある男がいて彼には妻がいたが、彼らはとても貧しくて辛うじてやり繰りしていた。彼らは畑から採れるもので生活をしてきた。

或る日、妻が身ごもり、夫婦は子供にどのような名前を付けようか尋ね合った。父親の方が言った：「ムシャンガマにしよう。この名前がどういう意味が知っているかい？ ムシャンガマとは《戦士》で、どんな困難でも切り抜けるのだ」。

子供が生まれて大きくなりこう質問した：「こんな生活から抜け出るにはどうすべきなのですか？ 僕の将来はどうなるのですか？」。父親は答えた：「我慢だ。急いでも何にもならない。時機を見て動くのだ。物事には時機というものがある」。

しばらく経ってから父親が彼に言った：「こちらに来て私の忠告を聞きなさい。この世では、物事の先まで行ってはいけないし、またその後ろに留まってもいけない。中ほどに留まるのだ」。「それでどうすべきなのですか？」。「いつかわかるだろう。いずれ世の中を見るために出かけることにしよう」。

あれほど待っていた日が訪れ、父親がムシャンガマに言った：「畑に何があっただろうか？ ゴイヤヴィエの枝を切って持って来てくれ」。ムシャンマガは尋ねた：「どこに向かうのですか？」。「風まかせだ」と父は答えた。

彼らは食糧を持って何時間もの間歩いた。彼らは或る村に着き、父親が子山羊を5万コモロフランで買った。歩いている間に彼らは草を切っては子山羊に食べさせた。そのうちムシャンガマは父親に、自分は疲れた、と言ったので、父親は子山羊の背に乗るよう言った。彼らは再び出発し、父親は人々が話すことに注意するよう言った。

或る村に入ると彼はこういう話を聞いた：「それにしてもこの御仁は残酷だな！ 見てみるよ、この小さい子山羊に自分の息子を乗せているし、おまけに綱を引っ張っている

る」。そこで父親は息子に言った：「わかっただろう。これがさっき私がお前に言ったことなのだ。これが人生の教訓だ」。

他の村では人々が彼らについてこう話していた：「この父親は残酷だな！　自分は子山羊に乗って息子を歩かせている」。父親が続けた：「よくわかっただろう。この連中が私について言ったことを」。子供はうなずいた。

彼らは旅を続け、子山羊を道に放すとまた人々が言った：「こいつらは罪人だ！　子山羊を暑い中、水も草もやらずに放すなんて！」。父親がまた続けた：「これがお前にわかってほしいことだ。お前が赴く社会の生活では、物事に先んじてはいけないし、遅れすぎてもいけない。中ほどにいるべきなのだ」。彼は父親の教訓を受け入れて理解した。

家に帰る途中で彼は父親にフランス語学校に行つて将来に備えたいと提案した。彼は田舎に住んでいたので父親は彼を町に連れて行き、彼が勉強できるように受け入れてくる家庭に彼を住ませた。その家には一人息子がいたがムシャンガマは息子とは公平ではなく別扱いされた。息子は食卓で食事をしたが、ムシャンガマは料理を作つて台所で食べた。息子が休んでいる時にムシャンガマは農作業を割り当てられたが、彼はいつも学校のノートを持って畑に行った。お腹が空っぽだったので、ココヤシの実を見た時に彼は空腹を感じたが、自分のものではないものを食べるのは泥棒なので彼は採るのを思い留まり、すきっ腹のまま勉強を続けた。

学校に行く時間になるとムシャンガマは町の子供と一緒に行こうと誘ったが、その子は少し休んでいたいと言ひ訳をした。町の子供はムシャンガマを軽蔑して田舎者だと思つていたので一緒に歩くのがいやだったからである。彼はムシャンガマの友達だと思われなくなかつた。彼がようやく学校に行こうとした時、ムシャンガマがそこにいたので、どこに行つていたのかと尋ねた。

最初の学期の成績が出た時、ムシャンガマはクラスで一番だった。時が経つにつれて子供はムシャンガマを嫌うようになり、いつも畑で仕事をしているのに何故いつもクラスで一番なのかわからなかった。彼はそのことを両親に話し、母親はムシャンガマに害を及ぼすために魔術師を探しに行くことを決めた。

母親はムシャンガマのTシャツを魔術師のところに持って行った。魔術師は母親に言った：「呪いをかけることは出来るが、その行いを後悔することになるぞ」。母親は執拗に頼んで呪いをかけるよう命じた。魔術師は母親にグウドウ・グウドウを作るよういった。彼女はそのお菓子を作って台所に置いた。彼女はムシャマンガをこっそり呼んで彼に言った：「台所に行きなさい。そこに大きなグウドウ・グウドウのお菓子が鍋の中にあるけれどお前の兄さんには言わないように。それを全部ひとりで食べなさい」。ムシャマンガは驚いて警戒した：「僕のためにグウドウ・グウドウだって？ 僕には何だって食べさせてくれなかったのに。それどころか、いつも台所に行って料理をしろと言っているのに、今度は出来たばかりのお菓子を食べさせるなんて」。お菓子を見て彼は思った：「いや、このお菓子は僕のためじゃない。これがもしパンのひとかけらだったら食べるだろうけれど、こんなお菓子を全部とは。これは僕のためのものではない。父さんは物事の先まで行ってはいけないと言ったし」。彼はその家の子供を呼んで言った：「来てくれないか、兄さん。君のためのお菓子があるんだ。そっと台所に行って食べるといいよ」。子供はお菓子を食べて、ひきつけを起こし始めた。両親は死にかけているのがムシャマンガだと思って母親が夫に言った：「留めを刺すから薪を持ってきてちょうだい」。彼らはそれが自分たちの子供だと分かって驚いた。ムシャマンガは走りながら急いで家を出て自分の村に行き、両親に告げた：「僕は死ぬところだった。あの人たちは僕に毒を盛ろうとしたけれど、死んだのはそこの子供だった」。彼の両親は答えた：「だからお前をムシャマンガー危機から逃れる者ーと名付けたんだよ」。

